



ぶんこだより

子どもたちと、もっともっと絵本を楽しんでもらいたいから…

1 JAN
2026

「こどものとも 世界昔ばなしの旅Ⅱセット」

「こどものとも 世界昔ばなしの旅セット」については、既にぶんこだよりで紹介しましたが、第Ⅱ集も発行されることになり、こうどうぶんこにも並べられることになりました。(第Ⅲ集も、発行準備中とのことです。)

第Ⅱ集は、日曜日の教会学校などでも、ぼちぼち「読み聞かせ」を始めています。

1月4日(日)の、教会学校の新年礼拝では、第Ⅰ集の「**チャマコとみつあみのうま メキシコ・ミステカ族のお話**」(著:清水たま子、画:竹田鎮三郎/福音館書店、1997年)を読みました。竹田鎮三郎は、1960年代にメキシコに移住、現在もメキシコに住んで、たとえば「チャマコとみつあみのうま」も、メキシコの伝統文化、伝統的な生活が描かれています。



そして、何というか面白いのは、描かれている動物と人間には、隔たりが感じられないことです。すべてが「地続き」なのです。

それは、梨木果歩が「**小さな神のいるところ**」(毎日新聞出版、2025年)で、「**ツンドラの記憶 エスキモーに伝わる古事**」(編・訳:八木清/閑人堂、2024年)で紹介している、ヌニヴァク島についての報告と重なります。



「それは半分が狐でもう半分が人間。男が話してくれたのは、現実と地続きのよう

でそうではあり得ない、因果応報^{たん}譚でも教訓話でもなんでもない、不気味だが詩情を^た湛えてもいる、不思議な話だった。そして彼は最後に『これはおとぎ話ではなく、本当にあった出来事なんだ。俺たちの歴史なんだよ』と付け加える。「今や消滅寸前の土地の言葉で語られるこういう小話は、彼らの魂の部分部分を成しているのだと思う。大昔とさして変わらない風景や風の音の強弱や空の昏^{くら}さ明るさを手がかりにして彼らは容易にその世界にアクセスできるのだろう」。

必ずしも、「昔話」についての言及ではないとしても、「チャマコとみつあみのうま」に、子どもたちが耳を傾けるのは、「大昔とさして変わらない風景や風の音の強弱や空の昏さや明るさを手がかりにして、彼らは容易にその世界にアクセスできる」からだと思います。

それこそが「こどものとも 世界昔ばなしの旅セット」や、その第Ⅱ集に集められている昔話です。

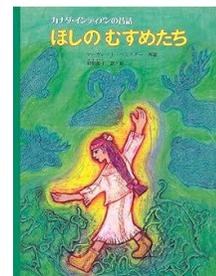
これらのことについては、「**日本昔話百選**」（編：稲田浩二・稲田和子、画：丸木伊里・丸木 俊／三省堂、2003 年）でも、編者たちがまえがきで言及していることと重なります。

「祖先は何のために昔話を語りついできたのでしょうか。たしかに、昔話は太古の祖先の幽暗な心をつつみこんでいます。そこが昔話のもついいしれぬ魅力であることは争えませんが、語り婆さの前には、『まんまの一かけらくらい食わんでも、おかし（昔話）を聞きたい』という幼な子があるのです。語り手はそこで、幼い魂に呼びかけ、幼い心をおどらせる話がしたかったのです。語り手の心は、遠い過去を背おいながら未来へ向かって歩んでおりました」。



「こどものとも 世界昔ばなしの旅Ⅱセット」の「**ほしのむすめたち**」（再話：マーガレット・ベミスター、画・訳：羽根節子／福音館書店、2005 年）は、「カナダ・インディアン^{インディアン}の昔話」です。

話は、「たなばた」を思い起こさせるような物語です。たぶん、どこに生まれ、どこで生きる人たちの世界であっても、人には実現して欲しい「願い」があって、日々の生活を大切に生きている時、それは現実のものとならなくはないのです。ウオーピーは、「かりの じょうずな ウオーピーは まいにち もりへ でかけては とりや けものを とって くらしていました」でも、足りないものがありました。「一人暮らし」だったことです。そんなウ



オーピーに、あたえられた「幸運」はしかし、そのままという訳には行きませんでした。しかし、厳しい自然の条件の中で生きる若者にとって、条件は何一つ変わりませんが、そして、結果も何一つ変わらないのでしょうか、語るに値する物語がそこから生まれる昔話です。

「おおきなカエル ティダリク オーストラリア アボリジニ・ガナイ族のお話」（再話・画：加藤チャコ／福音館書店、2005年）は、「自然」という、生きものはその条件の中で生きるとしても、決して作り変えることができないぎりぎりの条件を、「いかに生きるか」を、たぶん描こうとした物語のように読めます。



まあ、その挑戦の一つが「ちいさなウナギのノンヤン」の「ユーモア」かも知れません。ノンヤンにとって、水が干上がることは、ユーモアどころではありません。しかし、こわい顔でにらんでみるものの、それらしい芸もできず、しょせんは、自分がぐるぐる巻きになって、「グーグルグル」「グルシィ〜〜〜」とでも言うよりありませんでした。とは言え、これもまた、物語なのです。昔話は、力づくで、正當に、真正面からではなくても、「人生の局面」は変り得ることを示してみせる「知恵」の宝庫ではあり得るのです。

第Ⅱ集の**「こかげにごろり」**（再話：金森襄作、画：鄭淑香／福音館書店、2005年）は、韓国・朝鮮の昔話です。



今や世界では一国の大統領を、力づくで捕まえてきてしまうということが、起こってしまったりもしています。一方で、力づくで戦争を仕掛け、降伏を迫ったり、何よりも平和への歩みではなく「戦争の危機」を煽りたい人たちが、この国にもいたりします。そんな場合の、強者が勝者になることだけが、世界を作っていく訳ではないのです。

でも、「こかげにごろり」は、強くはない者たちの、毎日の生活の中で身に付けてきた知恵は、力づくではなくても、一日一日を明日につないで行くことが、あり得ることを物語で語ってみせます。

昔話の力です。

たとえば「こかげにごろり」はそんな昔話なのですが、何よりも見るべきなのは、ページ毎に繰り広げられる、生活者たちの様子です。生きものを育て、生きものたちと生きる、自然の営みの中での人々の生活が余すところなく描かれています。「力づく」ではない、日常というかけがえのない日々の力です。

「こかげにごろり」の表紙・裏表紙とも、そんな日常が描かれており、ページをめくる毎に、そんな様子に出会うことができます。

ぶんこだよりでは、こうして「こどものとも 世界昔ばなしの旅Ⅱセット」を紹介することになりました。なかでも、「バオバブのきのうえで」は、2つの視点からみつめてみることになりました。



2026年がスタートしましたね！

昨年末は、初めて「まち食堂」で絵本を読む機会をいただきました。「かさじぞう」(再話：瀬田貞二、画：赤羽末吉／福音館書店、1966年)を聞いていただきました。聞き終えた後、故郷の「雪」についてお話し下さる方がいて、それをきっかけに「ゆきのひ」(作・絵：エズラ・ジャック・キーツ、訳：木島 始／偕成社、1969年)のお話を聞くことができました。一つのお話をきっかけにつながっていった時間、すてきな時間が流れていたなと思います。さあ、今年はどんな絵本との出会いがあるのでしょうか。幸い、春から5年生になる息子もまだ「読んで！」と言ってくれますので、家で、こうどうぶんこで、たくさん子どもたちにお話を届けられたらと思っています。今年もよろしくお願いします。



「バオバブのきのうえで」アフリカ・マリの昔話

(語り：ジェリ・パパ・シソコ、画：ラミン・ドロ、訳：みやこみな／福音館書店、2005年)



遠く、アフリカ・マリに伝わる昔話です。アフリカの絵本と言うと「ダチョウのくびはなぜながい？」や「ひとつ、アフリカにのぼるたいよう」のように、太い縁取りや原色で元気よく描かれた動物たちがユーモラスな世界を繰り広げる、そんな楽しいイメージがありました。しかし、この絵本は違います。悲

しく、切なく、そして、力強い絵本です。

生まれて間もなく両親をなくした男の子は、「不吉な子」だと村の人たちに決めつけられ、森に捨てられてしまいます。森で自分の子どものように動物たちに育てられた男の子は、自分が村の人々から捨てられたということを知り、雨の季節が来ると大きなバオバブの木に登り悲しい歌を歌うのです...

この絵本から感じる「深さ」は何だろう？とっていました。作者紹介の欄を見ると、このお話を語ったジェリ・ババ・シソコは、マリ有数のジェリ（語りの匠）だということが分かりました。父親も語り部で8才の時から語りを仕込まれたということです。アフリカという大地で語り継がれてきたお話は、日本で暮らしていると想像もつかないようなことがたくさんありますが、絵本を通してその世界を垣間見ることができた気がします。「日本」にも「アフリカ」にも、長い年月と多くの人々によって、語り継がれてきたことがある。そんなことを知ることは、子どもたちにとってとても大切なことかもしれないと思います。

「おばけのトッケビ」

(再話：金森襄作、画：鄭 淑香／福音館書店、2005年)



続いては、お隣、韓国・朝鮮のお話です。お隣の国だけあって、昔の家の様子や野山の様子など、ちょっと日本の昔話と似た雰囲気が感じられます。

ある若者が、疲れてしまいお墓の近くで寝ていると、おばけのトッケビがやってきました。トッケビは、若者を死んだじいさんだと思ひこみ、生き返らせてやろうとします。そして、村の大きな家から娘の命をとってきて、若者の持っていた袋に入れました。夜が明けると、若者は娘の家に行き、娘の命を生き返らせてあげようとしています...

私がおもしろいなと思ったのは、おばけのトッケビと若者のやりとりです。トッケビは、ただただ死んだじいさん（本当は生きている若者）を生き返らせてあげようとし、若者はとにかくトッケビを怒らせないようにされるがまま（何と言っても相手はおばけですからね!）...

気が付けばハッピーエンドをむかえている若者と、なんとも憎めないトッケビのお話を、お楽しみいただければと思います。

今月のつくて!あそぼう!

アップル餃子パイ

焼き立ての熱々が、おいしい!
簡単カスタードクリームと、りんご煮を一緒に入れてみると、断然おいしい!



「ものづくりハンドブック8」
(著:「たのしい授業」編集委員会/仮説社、2014年)より

【材料】

餃子の皮 適量

りんご煮

りんご 1玉

砂糖 大さじ2

レモン汁 大さじ1

シナモン お好きなだけ

カスタードクリーム

卵黄 1個分

砂糖 大さじ3

薄力粉 大さじ1

牛乳 100ml

バニラエッセンス 数滴

【作り方】

① 「りんご煮」をつくる。

りんごの皮をむき、5mm程度の幅に切って、鍋に並べ、砂糖とレモン汁を入れて中火で加熱する。



- ② りんごの汁がなくなるまで煮詰める。 ③ シナモンを加え、粗熱を取る。
*焦げやすいので注意する。



- ④ 「カスタードクリーム」をつくる。
耐熱ボウルに卵を割り入れ、卵黄に砂糖をくわえて混ぜる。

- ⑤ 薄力粉と牛乳を入れてさらに混ぜ、ラップをせずに、レンジで1分加熱する。 ⑥ よく混ぜて再度 1 分加熱し、混ぜてさらにレンジで1分加熱。



- ⑦ バニラエッセンスを加えて、冷ます。

- ⑧ 「アップル餃子パイ」をつくる
餃子の皮にカスタードクリームを塗る。真ん中にりんご煮をのせる。
上からもう 1 枚、餃子の皮をのせて、端をはりあわせる。

- ⑨ フライパン、またはホットプレートで両面を焼く。焼き色がいたら、出来上がり！

今月のわらべうた

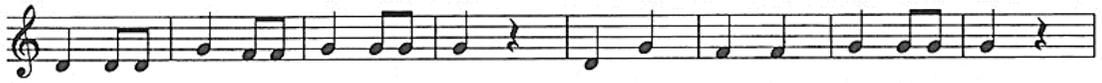
♪すずめすずめ



すずめすずめほしいや どのすずめほしいや



めぐちゃんすずめほしいや なにかせてそだてる



あずきまんまさちやかけて おにいてゆかれね



おにのいぬまにちよとおいで



♪かごめかごめ



かごめかごめかごのなかのとりーは



いついつでやーるよあけのばんに



つるとかめがすべ(っ)たうしろのしよめんだーれ?

♪ひねしりあい歌 (阿波のわらべうた)

- 一で いばらのとげがたった
二で にわとりがつついた
三で さんしよのばらがき
四で しじみの貝がはさんだ
五で ごつとい虫がさした
六つ 麦のいがじゃ
七つ なまずのひげがついた
八で はちがさした
九で 栗のいがじゃ
十^{とお}で とんびのくちばし
とつびあがるぐらい いたいぞ



こうどうぶんこの児童文学（教会学校文庫）

～みんなにたくさんの本を楽しんでもらいたいから～

「バオバブのきのうえで」アフリカ・マリの昔話

（語り：ジェリ・ババ・シソコ、画：ラミン・ドロ、訳：みやこみな／福音館書店、2005年）



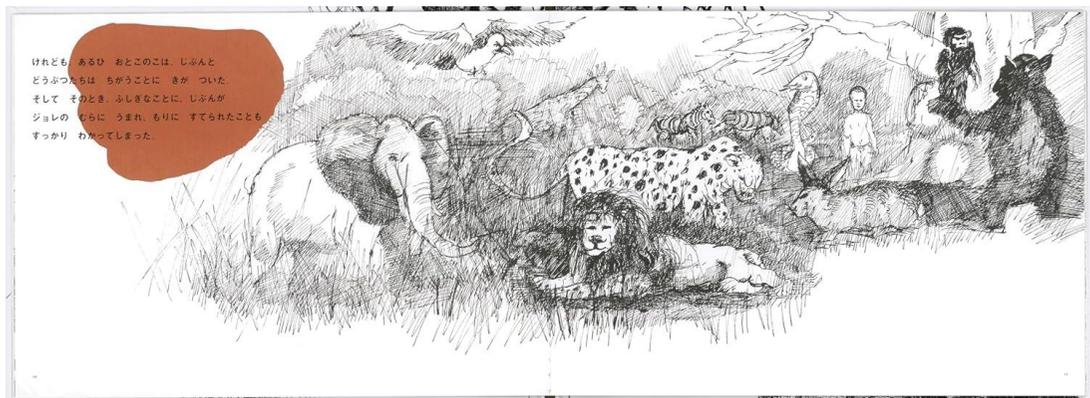
ジョレの村に男の子が生まれました。生まれて数か月で父と母が亡くなり、不吉な子どもだとされ、遠くの森へ捨てられてしまいます。男の子は森の動物達と育ち、木や虫や石の話す言葉のわかる強い子に育ちます。成長した男の子は自分の運命を悟り、バオバブの木の上で雨が降らぬよう歌をうた

います。日照りに困り果てた村人が説得に当たるも受け入れられることはなく、その悲しみを溶かすことができたのは、同じくらいの子どもだったのです…。

アフリカ・マリの語り部からの再話だそうです。国や人種を越えて、人々はこうやって、自然の中の人間、そして人間の真理を語り継いでいるものなのですね。

印象的なのが、黒一色で描かれていること。線が重なり合い、人々の表情をはっきりと読み取ることが難しい。そこが大きな魅力。遠い森へ男の子を捨てる人々、自分は捨てられたのだと気が付く瞬間の男の子、数年後都合よく声をかける村の人々…どの場面の表情も読者の想像力で物語が進みます。最後に王となった男の子。知恵と愛に溢れた穏やかで深い表情をしているだろうかと、思い浮かべながら絵本を閉じました。

シンプルでわかりやすい言葉。力強くも繊細で、アフリカの文化や空気を感じる絵。静かに伝わる素敵一冊です。



けれども、ある日、おとこのこは、じふんと
どうぶつたちは、ちがうことに、まが、ついた。
そして、そのとき、ふしぎなことに、じふんが
ジョレの、村らに、生まれ、もりに、すてられたことも、
すっかり、わかってしまった。

こうどうぶんこ によろこそ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」（著：石井桃子／岩波書店、1965 年）に促されるように、教会礼拝堂の隅っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始めました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなのです。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」によろこそ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。



1、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

2、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、なぞなど、言葉であそぶ時間です。

3、1 度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

4、貸出期間

2 週間

5、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

6、お問合せ

〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

西宮公同幼稚園内 こうどうぶんこ

TEL : 0798-67-4691

FAX : 0798-63-4044

MAIL : koudou@gamma.ocn.ne.jp





こうどうぶんこ



日時：毎週水曜日 15時～16時45分

*祝日は、休み。また不定期でお休みすることがあります。

場所：ぶんこの部屋（西宮公会堂附属 西宮公会堂幼稚園）

February 2 2026

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11 <small>発刊記念の日</small>	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23 <small>天皇誕生日</small>	24	25	26	27	28

March 3 2026

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20 <small>香茅の日</small>	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

編集後記

私たちが編集・発行しています。ご意見や感想、お聞きに
なりたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濱・田場・金澤